に用る事也、或は釜の蓋を先へとり、茶入を迹に取、茶杓を置わすれ、柄杓を遲ク取、茶調候内、色々怪我有之時、手前をたて直ス作法也、極秘なれば書面に難知、傳授なくては難成事也、貞翁常々被仰候は、茶の立前、道具の置合等、如何樣にしても不苦と清談ありしも、此略手前有之故也、茶湯を我物にして發明自由ならねば、右の手前は難立、依之初心の人に許ては、手前猥に成申ゆへ、其仁の器量次第に傳へべしとて秘事し給ふ事也、流儀の事理融通成事ゑらしめん爲に、有增書記者也、

一主君貴人、家來其外輕き者に御茶給候時は、略手前を一所二所も御加へ、御茶手前有之事に候、然共高貴の御方は、茶の湯一通り計にて、餘り古實を御覺無之ても、御慰の茶湯なれば、今の世にはやすらかなるが本意也、ゑかれ共略手前至極の事有之故に書加ル也、

〔海人藻芥〕若人ノ人前ニテ茶持アツカヒ不知バ無下也、大方可習知事也、建盞ニ茶一服入テ、湯ヲ半計入テ茶筅ニテタツル時、タバフサフサト湯ノ音ノ聞ユル樣ニタツルナリト、阿伽井顯弁上人被申キ、サレバ彼同宿ドモノ茶タツル音ヲ聞ハ尤可然也、

〔喫茶雜話〕一茶筅にて茶ふる事、まはりに茶のつかざるやう、かたまらざるやうに、底にかたまりなき樣に、いきのうせざるやうに、泡のきゆる樣、餘り久しくふらざるやうに、手先にてふるべからず、肩にてふるべし、是深き故實也、

〔貞要集四〕茶調る心持之事

一茶調ル心持有、拍子立、あら立、ねらい立、りきみ立、自慢ゑやん〳〵立、こはし立其外目にたつ立やう、みな惡し、麁相に取かと見れば眞に置、眞に取かと思へば草に置、味に取、味に置ず、拍子にかまはず拍子に置、はやくもなく、おそくもなく、ねばくらず、さらめかず茶を調るを、手前の心持といふ也、右此心持にて茶道可嗜事と、利休三齋之物語のよし古書に有之候、あまりおもしろき事